1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0971300017		
法人名	医療法人 渡部医院		
事業所名	グループホーム和 春夏ユニット		
所在地	栃木県那須塩原市大原間72-1		
自己評価作成日	令和2年8月25日	評価結果市町村受理日	令和2年10月23日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	令和2年9月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・[自立が尊重できる暮らし]をユニットの理念の1つに掲げている。本人が無理しない程度にスタッフは個人のできる能力を最大限に引き出し、寄り添える役割を果たします。
 ・「1人ひとりの生きがいの実現」をユニットの理念の二つ目に掲げている。1人ひとりにあった楽しみや思いを受け止め実現できる様に調整や気を配ります。
 ・限られた職員数ではあるが、それぞれに、毎日全員の入居者の申し送りがあり、常に最新の検討が行なわれ、入居者の向上を常に思って仕事をしています。
 ・間近に迫る死への不安、馴染みの環境を新たに構築しなければならない孤独感を、共に感じ寄り添い、少しでも安らぎと、日々楽しめるような支援ができるよう努めていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

清掃がいき届いた落ち着いた色調の共有空間は中庭や光庭があるため明るくゆったりとしている。展示物はほとんどなく、利用者と職員が共同で制作した季節を題材にした大きな壁掛けが飾られている。利用者は思い思いの場所でくつろいでいる。事業所の理念は「昔ながらの生活」「個人が尊厳される生活」「創造性豊かな生活」「住み慣れた地域で生活を継続する事の支援」であるが、掲げるだけでなく、管理者は関連図を示して理念を日頃のケアにどうつなげていくか職員に分かりやすく説明している。職員は利用者を年長者として敬意を払って接し、利用者のケアの優先を心がけ、安心して生活してもらえるよう丁寧に支援している。食事やその他の家事は利用者と職員が共同で行うようにして残存能力を維持しながら、毎日の食事や季節毎の行事食作りなど一緒に楽しんでいる。コロナ禍の中、家族の面会が減らないよう利用者のストレスが溜まらないよう一層心をくぼり支援している。風水災害対応マニュアルと風水害対策計画があり、避難訓練や学習会も定期的に行われている。風水害対策計画は他の災害時にも活かせる計画となっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念に【昔ながらの生活】【個人が尊敬される生活】【創造性豊かな生活】【住み慣れた地域で生活を継続する事の支援】、地域密着型サービスとしての理念を提示し実行している。各自が携帯している名札の裏や、事業所内に理念を掲示しており、理念共有をはかり、申し送りや会議の場の相談時など、常に意識して日々入居者と関わっている。	管理者は理念を掲げるだけでなく、具体的な関連図にして、それぞれの理念がどのようにしたら日々のサービスの実践につなげられるのか、分かりやすく職員に説明している。迷ったら何時でも理念に戻るために、職員は名札の裏に理念を書き留めている。ユニットの特徴を出すためにユニット毎にも理念を作り共有している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近所のスーパーなどには、毎日行く買い物を通じ理解してもらっている。地域の盆踊り、行事など可能な限り参加し交流に努めていたが、今年度に限り新型コロナウイルスの感染拡大防止のため交流を自粛している。また、自治体に加入し回覧も確認し地域の情報などを確認している。	3月から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、利用者の日課であった近所のスーパーへの食材の買い物も家族との面会も自粛になった。地域の行事もすべて中止になり、地域とのつきあいもできなかった。コロナ禍の中、地域との新しいつきあい方を模索中である。	コロナ禍が収束するまで、以前と同様の地域とのつきあいは限られてしまうと思われるが、できないと考えるのではなく、何ができるかの視点でできることを増やしていくことを期待する。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域密着型として中高生のボランティアや大学生の実習などを受け入れている。認知症に関する新聞、広報誌などの取材などにも対応し、地域の方たちに理解、関心を持って頂くよう努力している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に一度の頻度で開催。会議では家族・入居者から出た意見を参考にサービス向上に活かしている。	コロナ禍以前は運営推進会議を2ヶ月毎に開催、事業所と利用者の状況の報告、意見交換を行い、風水害対策マニュアル作成時には協議事項としていた。4月からは市の要請で縮小開催となっていたが11月から通常開催になる予定である。途中書面開催も試み、事業所からの報告だけでなく、参加者から自粛中の利用者の様子を気遣う質問もあった。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者と直接の話し合いまたは、電話等で困難事例や制度についての連携を取り、情報を共有している。運営推進会議以外に、事故発生・入退所連絡も行っている。	市担当者が毎回運営推進会議に参加することで情報の共有を図っている。事故についても怪我、薬の飲み忘れ、離設により利用者が一時不明になったことなど報告し、事故扱いにするか判断に迷う時は相談している。新型コロナウイルス感染対策に関する情報の伝達はある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	開所時から現在まで身体拘束はしていない。全ての職員は、身体拘束適正化のための指針を十分理解しており、11項目ある禁止の対象となる具体的な行為を把握している。定期的な勉強会も行っており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	運営推進会議と同日に開催される「身体拘束適正化委員会」の他、年2回事業所内での研修会を開催している。「不適切な介護を見逃していると拘束につながる」という管理者の信念のもと研修に力を入れている。冊子を使ったりDVDを見てディスカッションをしたり、欠席した職員にも資料を読んでレポートを提出してもらっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の防止に努め、職員間でもストレスを溜めない、見逃さないよう話合っている。全国グループホーム協会権利擁護パンフレットを使用し、常に読める場所に掲示し、意識の啓発と虐待の防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在利用している入居者はいないが、管理者や数名の職員は研修などに参加し、理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時の相談時等に管理者が十分な相談時間を設けている。また、ケアプラン説明、加算改正、重要事項説明書など変更時、同意書取り直し時も行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関内に意見箱を設けたり、外部の苦情受付機関を紹介し意見を表せる機会を設けている。家族へ電話連絡や面会時、会議など随時確認し信頼関係を築き、意見が言いやすい環境づくりに努めている。	家族が意見や要望を言いやすい環境づくりに努めており、職員も家族と顔を合わせる時には声をかけている。家族からは満足している感謝の言葉は多く聞かれるが、運営に関しての意見、要望はなかなか出てこない。利用者が酒やたばこを飲みたいという希望があれば、家族と相談し柔軟に対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度開催しているユニット会議等において、職員の意見・提案を聞く機会を設けて反映させている。また、管理者は日頃から職員の意見や考えを確認しており、サービスの質の向上につながる事を実践している。	毎月開催しているユニット会議、3ヶ月毎の全体会議、毎日の申し送り職員が発言できる機会は多い。出されるのは利用者の処遇に関するものが多く、コロナ禍の中で重要な課題として利用者のストレスをためないケアのあり方等話し合われている。イベントやレクリエーションを企画する時に材料等必要なものは購入してもらえ、職員は意見要望を出しやすいと思っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事評価制度を導入しており、年2回のボーナスや年1回の昇給額に査定され向上心を持って働けるように努めている。給与保障面だけでなく、研修・勉強会などを通し仕事の楽しみ方等を考える機会を作っていきたい。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員が認知症介護実践者研修を受講するよう研修に申し込んでいる。事業所内に専門課程2名、基礎課程8名が研修終了している。更に認知症介護指導者養成研修も1名終了し、現場の職員指導的立場で対応している。また、スキルアップを図る為のテキストや参考書を休憩室に整備している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス会議に管理者や主任が集まりに参加。市のケアマネジャー連絡協議会に計画担当者または管理者が参加し、同業者との交流を通して様々な情報交換や連携を図る取り組みを行っている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者本人が安心して入居出来る様に、必要があれば面会し、本人のさまざまな言動を受け止め初期の段階で信頼関係を築けるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人のみでなく、家族の希望や意向等も十分に聞き、必要があれば電話だけでなく、自宅に出向いて相談の機会を設けている。入居に際し、会議等でも職員間で家族が困っている事を話し合っている。職員は、センター方式などを利用し、事前に情報を共有している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に見極め、必要に応じて各種機関と連携している。待機中に中重度に移行する可能性がある際には、併設施設(介護老人保健施設)や、特別養護老人ホームなどの情報提供を行い、共に考えていく事を提供している。相談を受けた際には、担当のケアマネジャーとも連絡を取りながら情報を共有している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の出来る事、得意な事を中心に、日々介護する立場だけではなく、共に生活をしていくという環境である。具体的に調理の作業工程の一部や配膳、下膳など日々一緒にいき、時には利用者教に教えて頂いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や必要に応じて連絡し、現状の報告・相談、指示を頂いている。家族と一緒に参加できる行事等にも協力をお願いし、一緒に楽しめる機会を設けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	実家やお墓参りなどに外出支援、又は、自宅や自宅付近の馴染みのお店などに出掛けたりしていたが、今年度に限り新型コロナウイルス感染拡大防止のため外出を自粛している。面会は自由に出来るような環境である。昔からの友人との手紙のやり取りの支援も行っている。	コロナ禍以前は墓参りや馴染みのカフェや美容院に家族や職員と出かけていたが、自粛が続き、面会は再開されたものの以前のように馴染みの人や場との関係継続はできていない。管理者はこの支援の継続が課題だと考え、小規模でも以前の行事等を通じて馴染みの人との出会いの場を作りたいと思っている。家族からの希望があればコロナ禍であっても事業所からの外出時の注意点やお願いを了承してもらってお盆に帰宅した人やお彼岸に墓参りをした人もいた。	コロナ禍の中、馴染みの人や場との関係継続支援ができにくくなっているが、利用者の記憶にある懐かしい人や場所、思い出等について会話を増やしたり、家族にも協力してもらい、今できることを積み重ねてコロナ後につなげて欲しい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を把握し、必要に応じて個別の環境調整も行い、不快にならずに生活できるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	重度化などさまざまな理由により退所し、他施設や病院に移られた利用者にも面会に行っている。死亡された方においては、葬儀出席、初盆時などにも連絡させていただいている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所前や相談時に、家族、本人に聞き取りをし、又はセンター方式を協力してもらい、把握に努めている。重度の認知症があり、ご家族からも情報を得る事が少ない場合は、分かりえる本人の希望と和の理念に沿って本人本位に努めている。情報不足の入居者本人、ご家族・重要他者などとのコミュニケーションを深め、悔いの無いよう和での生活を送れるよう努め支援していきたい。	入居時に利用者や家族に記入してもらったセンター方式のアセスメント表に、入居後に職員が利用者や接しながら表情で察したり、心地いいこと嫌なこと等感じ取り気づいたことを付け加え、共有して支援に役立てている。利用者の以前の習慣に近い生活を支援しながら、利用者の思いや意向の把握に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に、管理者が家族、本人に聞き取りをし、又はセンター方式を協力してもらい、把握に努めている。日々の生活上の暮らし方などは記録、申し送りなどで共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活上の事などは記録、申し送りなどで共有している。又は、センター方式などを活用して。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員一人ひとりが常々意識して、ユニット内での情報共有を図っている。ケアの内容についても家族に説明し、意見を伺い、同意を得ている。アセスメントツールとして、センター方式を活用しており、家族や本人に記載できる所はして頂き、参考にしながら十分に話し合っている。現状に即して、直ぐに計画の見直しは出来ないが、付箋紙など利用し、ケアプランに添付し現状の状況を把握、検討を行っている。	センター方式でのアセスメント、現場の職員の意見、受診時に聞いたかかりつけ医の助言、事前に聞いた家族の要望を参考に介護計画を作成している。介護計画書は大きく拡大されて一目で利用者の情報が分かるようになっており、そこに職員は気づいたことを付箋でメモを付け情報を共有し、全員がモニタリングに参加している。利用者の状態に変化があれば、毎日の申し送りや毎月のユニット会議で計画の見直しが検討される。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア記録、申し送り、センター方式を活用し、情報共有と検討を行っている。付箋を利用し新しい情報を書き込み、情報共有やケアプランの見直しに活かしている。申し送りに参加しないスタッフも情報共有が出来るように、申し送りファイルやノートがあり内容を確認出来る様になっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	訪問マッサージや訪問歯科診療、訪問美容室等、ニーズや希望に応じて柔軟に支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	傾聴や中高生、高齢者ボランティアの活用。離設時等の緊急時の公共機関への協力体制の確保は出来ている。消防職員を含めた、定期的な消防訓練や組織内の託児所との世代間交流は行っている。本人の掛かり付け美容室、馴染みの商店などに継続していけるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所時に、希望する医療機関を確認している。併設の医院への受診等もやっている。家族による、かかりつけ医への受診もある。緊急時搬送の希望や最終的な施設などの希望を確認し、つながりを保持している。基本的には、馴染みのかかりつけ医や希望病院を推進している。付添いにおいては、家族のみ・スタッフのみ・家族と管理者など、話し合いにおいて対応を決定している。	かかりつけ医の受診は家族の付き添いを基本としているが、家族が対応できない利用者には、有料で受診支援を行っている。併設された医院の受診では職員が通院介助を行っている。受診に必要な情報は家族に伝え、家族からの受診報告はケア記録、申し送りノートに記録し職員で共有している。非常勤の看護師がおり、利用者の体調の変化や緊急時などいつでも相談できる。また、併設された医院とは医療連携契約をしており、24時間365日のコール体制をとっている。さらに訪問歯科や訪問マッサージなど家族や利用者の希望に沿って柔軟に対応している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤の看護師が来て、相談、支援が出来ている。また、勤務時間外でも、電話連絡にて相談、支援依頼が出来ている。その他、併設医院の看護師にも連絡、相談をしている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は家族の承諾のうえ、医療機関に本人に関する情報提供を行い、継続したケアができるようにしている。また、入院中、病院へ行って手術後の様子を確認したり、退院に向けての相談を行い病院関係者と協働している。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化に移行中の方には施設内の会議などでも最善の方法を話し合い、家族との相談を管理者が行ってきている。その都度、申し送り・春夏会議などで状態の変化などの報告、予測される今後について相談し対応に努めている。重度化に移行した方には、管理者が医療機関、福祉機関との連携を行っている。	「看取りに関する指針」がある。重度化した場合、医療依存度が高い胃ろうや経管栄養などは対応できないことや、風呂が家庭用浴槽なので入浴介助が難しいことを家族に説明したうえで、利用者や家族に看取りの希望があれば事業所としてできるだけその意向を尊重している。利用者にとって何が最善か家族と職員で話し合いながら事業所が対応し得る最善の支援をしたいと思っている。そのために管理者は職員の研修や勉強を進めている。	管理者は、看取りが必要だと考えている。看取り期のケアの勉強会を定期的実施して、職員が緊急時の対応を身に付けることが望まれる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入所時から終末期、重度化した場合にどうしていきたいかを入居者ごとに家族に確認と書式にして残している。時間が経ち又は状況によって家族の希望も変わることもあるので、レベルの変化ごとの確認は今後も行っていく。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	グループホームの消防法により平成22年にスプリンクラーの設置。各種災害時のマニュアルがあり、避難訓練は定期的に年に2回、日中と夜間想定で行っている。 又、地域(消防団など)に協力体制を依頼している。	消防署立ち合いのもと、夜間想定も含めて年2回の消防、避難訓練を実施している。また火災などの災害時には消防団、民生委員、近所の人に協力してもらえるように依頼している。前回の外部評価の改善課題とした「風水災害対応マニュアルの整備」が実行され、新たに「風水害対策計画」が作成され、それに沿って実際に避難訓練が行われた。備蓄品は、食料3日分、医薬品、衛生用品、介護用品等十分備えており、コロナ禍であってもマスク等困ることがなかった。	各種災害時のマニュアルに加えて新しく「風水害対応計画」が整備された。どの災害時でも計画に沿って昼夜問わず、利用者一人ひとりの状態に応じた避難誘導がスムーズにできるよう、すべての職員が避難訓練の体験を重ね、身につけることが期待できる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報の保護は、施錠できる所へ保管し、言葉掛けにも注意を払っている。呼び名についても、馴染みの呼び名を希望されている場合を除き、「〇〇さん」と呼ぶように徹底されている。新人スタッフにも、オリエンテーション時に指導と誓約書にサインをしてもらっている。言葉掛け、接遇に関しても常々意識してもらえるよう、日々指導していきたい。また、生活上ではトイレの声掛け失禁物の回収など他者に気付かれないよう注意している。	職員は利用者を年長者として敬意を払って介助し、利用者が安心して生活できるように丁寧な言葉使いでゆっくり話しかけるように心掛けている。失禁の際には、騒がずそっと処理したり、入浴時、異性介助を嫌がる場合は、同性の職員に変えるなど配慮している。居室に入室の際はノックを行いプライベート空間を大切にしている。書類は鍵付きの棚でしっかり管理されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	理念に沿い、その方らしい生活が送れるよう、意向の把握に努め、原則として自己決定して頂いている。個別的に必要な事は、毎日確認対応させていただいている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来る限り、本人のペースを大切に支援を行っているが、勤務帯で手薄な時間に本人のペース・希望に添えない時がある。職員数は最低限の確保はされている為、手薄な時間以外での希望に添えるケアを実践している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服などは、本人の希望の持ち物で対応できている。本人・家族の希望で理美容も対応できている。女性の方において、持参してきている方はお化粧を行える支援が出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の説明、今後の参考の為に評価など話題を兼ねて確認している。食材の準備から飲食の終了時まで次に食べたい物等も話題に出て来やすい。又、馴染みの食器などを使う事により、安心や、思い出などを提供できる。一人ひとりが、それぞれの能力に合わせ、役割を持って米とぎ食材切り、調理品の取り分け、配膳、片付けなど行っている。又、昼食にはそれぞれに何が食べたいか確認、参考にしながら一緒に食材も購入してくるなど、支援を行っている。食事レベルが低下されている方には食べやすい硬さ大きさ見えやすさ持ちやすさなど様々な目線で食事が楽しめるよう努力している。	朝食、昼食は、職員が利用者の希望を聞いてメニューを決め、時々利用者と一緒に食材をスーパーで購入し調理をしている。夕食は一部外部の配食業者を利用している。利用者の好みや状態に合わせてメニューを変更することもある。職員は利用者がそれぞれできる調理や片付けをさりげなく手伝ってもらっており、職員の笑顔や笑い声が食事風景を和やかにしている。コロナ禍で外食が難しくなったが、職員が中庭で流しそうめんやバイキングを企画したり、職員と利用者が一緒に梅干作りやおせち作りをして、四季折々の食を共に楽しんでいる様子が窺える。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	重度化し、食事摂取の理解が出来ず、なかなか食べれない方には、その日のレベルに合わせ、食材の大きさを調整したり、食事摂取に集中できるよう、環境設定を調整したり、又は介助を行ったりしている。嗜好の問題で、食べない方へも代替提供している。一人ひとりの状態、希望に合わせた、食事の支援が出来ている。水分摂取もお茶の時間以外にも希望にあわせ、好みの物を飲んで頂いているが、摂り過ぎてしまい浮腫著明な方には、調整を図っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	夕食後のケアはその方のレベルに合わせた口腔ケアが全員徹底されている。毎食時は希望者が行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を付け、声掛けや、時間・誘導、ポータブルトイレなどの設置をし、安心できる環境調整を行っている。誘導などを行い、オムツ・パットなどの使用を減らすケアに取り組んでいる。	排泄チェック表をもとに、職員は利用者の排泄パターンやトイレサインを把握し、タイミングを計り声掛け誘導をしている。夜間はトイレで排泄できる人、睡眠を優先したい人など個々に合わせて対応をしている。利用者の羞恥心や不安な気持ちを少しでも軽減できる支援を心掛け、トイレでの排泄支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	睡眠、適度な運動、バランスの取れた食事などの提供に努め、予防と便秘時の対応(冷ミルク・ヨーグルト・ヤクルトや服薬、腹部マッサージなど)を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	時間は個別希望時間に入れている。季節に合わせて菖蒲湯、ゆず湯など行ったり、希望に合わせて入浴剤を使用したりしている。	浴槽は家庭用と同じ大きさで、脱衣場は床暖房となっている。風呂の湯は入浴状況を見ながらこまめに交換している。朝8時から夜9時まで好きな時間に入浴が可能となっており、毎日入浴する利用者もいる。入浴を拒否する人でも声掛けの工夫で週3回は入浴できるよう誘導している。ある程度一人で入浴できる利用者には、介助することは控えて見守り対応している。利用者それぞれの要望に合わせて入浴を楽しめるように支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床時間、就寝時間は本人のペースや体調に合わせている。昼夜逆転のリズムになっている方への支援として室温調整の他、日中は家事活動・散歩・レク、夜間はホットミルク・ココア対応なども行なっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各入居者の服薬内容の説明表をファイリングし、確認出来るようになっている。又、追加薬、臨時薬なども受診時に受けた説明は申し送りし個人の薬について把握できるよう業務マニュアルがあるが、今後も服薬ミスや漏れを防ぐ対応を心掛けていきたい。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事活動に生きがいを感じている方、散歩で気晴らしをされる方、大好きだった近隣の盆踊り、畑仕事、草取りに参加などにそれぞれに対応している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	必ずしも、希望時間に戸外に出かけられるとは言えない。早朝や職員の交代時間など、職員の手薄な時間に希望が有っても、見守る事が出来ない。毎日、昼食の食材をかうため希望者を募り、買い物の外出は出来ている。希望日時に添えないときは、時間をずらしたり、日取りの変更を約束し対応している。	日常的な買い物や利用者の希望に沿った外出はコロナ禍で困難になっているが、毎日のように敷地内を散歩をしている。職員と一緒に野菜を栽培している畑を眺めたり、時々訪れる同法人の託児所の子どもの様子を窓越しに見て楽しんでいる。また、希望者を募って3密が避けられる戸外のバラやひまわり園見学を慎重に検討して実施している。	コロナ禍で外出支援がさらに難しくなっている現状がある。外出は利用者と職員両方のストレス発散できる機会だと捉え、戸外に少しでも出かけられる機会を増やす工夫をすることが期待できる。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物支援などでは、社会性の維持に努め、出来る限り入居者本人財布を預け支払いをして頂いたり、所持可能なレベルの方には、能力に応じて本人や本人家族希望で金銭を所持頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の意向(時間帯/FAX)もふまえ、電話やFAX、手紙のやり取りが出来るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間の清潔保持は主に夜間帯などで行っている。暖色系の電球なども使用し落ち着いた環境作りをしている。フローア・各居室も湿温計を置き快適な生活環境になるよう支援している。	食堂を兼ねた居間は明るく開放感のある部屋で、快適に過ごせるよう床暖房になっている。大きな窓からは中庭に自由に出ることができ、そこにはテーブルやいすが置かれ利用者が日光浴や外の風を感じながらお茶を飲んだり憩いの場になっている。感染症予防のため居間に空気清浄機、冬場にはさらに加湿器が置かれ、手すりは1日3回消毒している。掃除がいき届いており事業所全体が清潔である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各自、個室の為、独りになりたい時は居室に戻っている。他入居者と馴染めない方がおり、スタッフが寄り添い居場所を見つけられる様努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	一人ひとりの馴染みの使い慣れた家具類を持ち込み、生活している。家での家具配置などを参考にし、居室のレイアウトも検討。今後も入居時などに馴染みの物を使う事の大切さをご家族に理解して頂く努力をしていく。必要であれば、入居時に、一緒に引越しの準備をさせて頂く。	居室のドア横には、名札とさりげなく利用者の作品が飾られている。居室は、腰高の窓があり、クローゼット、エアコン、非常ベル、室温計が備え付けられている。持ち込んだベッド、衣装ケース、テレビ、いすなどが置かれ、家族の写真やぬいぐるみなどが飾られている。衣替えは季節ごとに家族にお願いしている。職員は利用者がその人らしく落ち着いて生活できるように配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内部はバリアフリーになっており、一人ひとりのレベルに合わせ、シルバーカーや、杖などの使用、消灯時間の不安対応にスタンドライトの使用で安眠支援なども行っている。		